JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

6

2025
JUNE

JOCV 60TH ANNIVERSARY

特集

日本人だからこそできるコト!
日本を生かした活動あれこれ

派遣国の横顔［チュニジア］
青少年活動、音楽、スポーツ系職種の派遣が盛ん
壮大な遺跡群など見どころも豊富な国

活動先の小学生は片道5～6kmの未舗装路を歩いて登下校しています。苦労して通学する彼らのため、一生懸命教えたいと思っています（パプアニューギニア）

JICA
海外協力隊

JICA海外協力隊発足60周年
特別インタビュー
世界と日本を変える力

日本の宝たる協力隊員のグローバルな視点での社会還元に期待したい

明石要一（あかしよういち）さん

一般社団法人協力隊を育てる会 会長

奈良教育大学卒業後、東京教育大学大学院修士課程修了、同博士課程単位取得満期退学。1993年に千葉大学教授に就任し、2013年定年退職、以後名誉教授に。14～23年に千葉敬愛短期大学学長に従事。NPO法人生涯学習応援団ちばなど多数の団体の理事長や会長、アドバイザーも務める。24年より現職。

私は人であれ、組織であれ「ミッション」「ビジョン」「パッション」の3要素が大切だと考えています。中でも協力隊を育てる会（以下、育てる会）のミッションを象徴するのは、「協力隊は日本の宝、育てて活（い）かす平和の種まき」というスローガン。とてもシンプルでわかりやすく、育てる会、そして協力隊の果たすべき役目を端的に表していると思います。協力隊事業は今年度で発足60周年を迎えますが、60年たっても平和の種まきこそが揺るぎないミッションであり、それを支えることがまた、育てる会のミッションなのです。

協力隊を支援・応援する団体として取り組む中で、私たちが皆さんにとりわけ期待しているのが、日本社会への還元です。2018年よりJICA、文部科学省、育てる会の三者が実施した調査に私も携わったのですが、協力隊参加者は子ども時代から活動的で意欲的。そして隊員としての活動を通して、さらに力をつけている。つまり、へこたれずに頑張る力や自己肯定感などの土台があり、それが協力隊の2年間で花開いているのです。

特に就職・進学といった進路だけでなく、地域おこしや起業といった道を選ぶ例も少なくないのは協力隊を経験した方々の特色です。私のゼミの教え子でも、協力隊からの帰国後に結婚し岩手県へ移住して教員として働き、さらに東京に拠点を移してフリースクール事業を立ち上げた人がいますが、そのように一つの枠に収まらない“尖（とが）った”人材が多くいることに、私は大いに期待を持っています。

総務省による「地域おこし協力隊」にも多くのOVが手を挙げていて、1次産業の振興や観光開発、空き家対策などさまざまな分野で活躍していますが、海外で自らの活動を手探りで開拓してきた協力隊経験者にはお手のものでしょう。地域の宝を発掘して観光につなげる、なければつくっていくノウハウを持っているはずです。目下、日本の将来のために人口1万人以下の町を維持することが必要だと考えられていますが、途上国での活動経験を、ぜひそんな町で生かしていただきたい。そのために、例えば各地にいる協力隊経験のある地方議員などと連携して地域で事業を起こす支援を行うなど、私たち育てる会の国内ネットワークからサポートできることもあると考えています。

私が今、現役隊員の方々に贈りたいのは「千里を照らし、一隅を守る」という言葉です。国際的な視点を持ちながら日本の地域を活性化する、グローカルの考え方です。この60年間で、実に累計5万7,000人もの隊員が世界中で活動していて、これらの人材はまさに日本の宝です。還暦という言葉には、生まれた年に戻るという意味があります。私たち協力隊を育てる会としても、今一度、日本が世界に貢献できる「平和の種まき」という原点を見つめ直したいと思っています。

Text＝池田純子　Photo＝飯渕一樹（本誌）

COLUMN ― 表紙によせて

活動先のソゲリ小学校に赴任した頃、「子どもたちはどんなところから登校してくるのだろう」と思い、一緒に下校した時の写真です。校門を出て5分も歩くと周囲は熱帯サバンナの草原。未舗装路を毎日片道5～6km歩いて登下校する彼らの足元はサンダルやはだしで、喉が渇いたら小川の水を飲むのだそうです。苦労して通学する子どもたちのために一生懸命教えようと心に決めた思い出の一枚です。
戸髙 將さん（パプアニューギニア／小学校教育／2023年度1次隊・宮崎県出身）

JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード
CROSSROADS

6
2025
JUNE

CONTENTS

2　JICA海外協力隊発足60周年 特別インタビュー

3　CONTENTS／索引

4　JICA Volunteers' Reports

5　知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから
派遣国の横顔［チュニジア］

9　お悩み相談
アドバイスを聞きました！

10　［特集］
日本人だからこそできるコト！
日本を生かした活動あれこれ

16　スキルや意欲で道を開く
就職ストーリー

18　派遣から始まる未来
先輩隊員たちの社会還元

20　INFORMATION
―JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

21　JICA海外協力隊派遣現況

22　あの日、地球の、あの場所で。

23　隊員めし―任地の食生活に彩りを！

24　公開！ 私の派遣国生活［ホンジュラス］

国別索引

	掲載ページ
シリア	9
セネガル	4
中華人民共和国	22
チュニジア	6、7、8
ニジェール	18
パプアニューギニア	1、16
ボリビア	10
ホンジュラス	24
マラウイ	23
モンゴル	12
ルワンダ	14

職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	14
コンピュータ技術	16
電子機器	6
青少年活動	7
環境教育	10
陸上競技	9
卓球	8
日本語教育	22
小学校教育	1
保育士	18
看護師	4
薬剤師	23
理学療法士	12
栄養士	24

出身都道府県別索引

	掲載ページ
青森県	12
宮城県	24
群馬県	10
千葉県	6、7、18
神奈川県	4
愛知県	22
大阪府	16、23
山口県	9
長崎県	14
宮崎県	1
沖縄県	8

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に9回発行しています。

【凡例】JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ケニア／環境教育／2025年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

JICA海外協力隊には、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

UD FONT 見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。
VEGETABLE OIL INK
FSC www.fsc.org ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C015352

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

地域に伝わるバッグ作りのグループとの出会いから、女性たちの経済的自立を目指す活動が続いています

賣野由紀子さん（セネガル／看護師／2022年度3次隊・神奈川県出身）

2023年にセネガルの首都ダカールから150kmほどのケベメール市に赴任、地域の保健施設を管轄するケベメール保健区に配属され、妊婦や乳幼児の母親を中心に、保健や生活の課題に取り組みました。管轄地域の村落を調査して強く感じたことが、女性への自立支援の必要性でした。一夫多妻が多いセネガルでは、妻は夫への依存度が高く、何かあって夫が働けなくなると、たちまち貧困に陥ってしまうため、女性自らが生計を立てる手段が必要だと思ったのです。

そんな中、“ケベサック”のアトリエが私の住まいの目と鼻の先にあることを知ったのは偶然でした。ケベサックとは、色鮮やかなアフリカ布を使った手作りバッグで04年に村落開発普及員隊員が、女性の就労支援を目的に立ち上げたグループによって作られてきました。私もケベサックは以前から知っていて、どこで作られているのか探していたのですが、メンバーの家族が町を歩いていた私を呼び止めてアトリエを案内し、「昔、日本人の隊員とここでバッグ作りを始めたのよ」と話してくれたのです。

私はケベサックの立ち上げメンバー6人と、コロナ禍を経てほぼ開店休業状態だったアトリエを再稼働させることにしました。自分たちで少しずつ布を買ってバッグ作りを再開したところ、1年ほどの間に、JICA事務所の職員が購入してくれるようになり、さらに他の隊員たちから土産としての需要も増えてきました。バッグだけでなくポーチやコースターなどの小物も好評で、作っては納品、作っては納品といった日々に。

私の目的は、経済・社会・栄養面で窮状に陥る可能性があるハイリスクな女性たちのサポート。そこで、生活困窮により痩せている女性や16歳の若年妊婦など、地域の各保健施設の受診者たちから見つけた女性たちに、初めは無給だけど、ケベサック作りの職業訓練をしないかと声をかけたのですが、「すぐにお金にならないことを苦労してまでやりたくない」という返事でした。

しかしグループのリーダー役の女性が、「あなたが想定していた相手ではないけれど、この地域には他にやる気のある女性がたくさんいるよ」と言ってくれて軌道修正。あちこちに声をかけて8人の訓練生が加わり、「小さなハートプロジェクト」（※）の助成金でミシンを修理したり、布を購入して職業訓練をサポートしました。

メンバーと、一生懸命続けた訓練生の一部の女性も、収入を得られるようになりました。私の活動を見てきたメンバーの家族から、「ケベサックを手伝ってくれてありがとう」と言われたり、配属先の上長から「ナフィ（賣野さん）は『魚を与えるより魚の釣り方を教えよ』ということわざを体現しているね」と評価してくれた時は、関わることができてよかったと思いました。

アフリカ小物を扱うショップ「jam tun（ジャムタン）」代表で、セネガルOVの田賀朋子さんが買いつけてくれることも大きな助けになっていて、今後も継続的な取引をお願いしています。04年の立ち上げ時は、働き盛りの40代だったメンバーたちも今や60代。人生経験を積み重ねた女性たちが伝統のアフリカ布で作るバッグや小物は、身につけているだけで明るく元気になれる、私にとって欠かせない宝物です。

※小さなハートプロジェクト…一般社団法人協力隊を育てる会が行っている隊員支援活動。隊員本来の業務以外で、派遣地域の人々の生活改善や向上に役立てるため、日本の民間グループや市民から支援金を募り、助成金を送っている。

左：ケベサック作りが軌道に乗り、職業訓練の女性を受け入れる女性グループのメンバーと賣野さん。「私が帰国する前にも、職業訓練を続けると言ってくれて、その気持ちがとても嬉しかったです」
上：アトリエには8人の女性たちが加わり、グループメンバーから技術を教わりながら製品作りに取り組んでいる

Text＝池田純子　写真提供＝賣野由紀子さん

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから

派遣国の横顔〈チュニジア〉

Profile of the partner country of JOCV

青少年活動や音楽、スポーツ系職種の派遣が盛ん
壮大な歴史が培った遺跡群など見どころも豊富な国

Text＝工藤美和　写真提供＝ご協力いただいた各位

チュニジア共和国
Republic of Tunisia

チュニジアの基礎知識

面積：16万3,610㎢（日本の約5分の2）
人口：1,246万人（2023年、世銀）
首都：チュニス
民族：アラブ人（98%）、その他（2%）
言語：アラビア語（公用語）、フランス語（国民の間で広く用いられている）
宗教：イスラム教スンニ派（ごく少数だがユダヤ教、イスラム教シーア派、キリスト教も信仰されている）

※2025年1月17日現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/tunisia/index.html

派遣実績

派遣取極締結日：1974年7月22日
派遣取極締結地：東京
派遣開始：1975年4月
派遣隊員累計：532人

※2025年4月30日現在
出典：国際協力機構（JICA）

お話を伺ったのは

相澤葉子さん

JICAチュニジア事務所・企画調査員（ボランティア事業）。大学を卒業した後フランスに留学し、帰国後は通算16年以上、駒ヶ根青年海外協力隊訓練所で英語とフランス語の講師を務めた。その間、カナダ人の夫と共にサウジアラビアやチェコ共和国などの海外各国にも在住。2020年から企画調査員（ボランティア事業）としてJICAラオス事務所に勤務。23年より現職。

チュニジアがフランスから独立した1956年、日本はすぐに国交を樹立していて、来年で70周年を迎えます。今年は当国への協力隊派遣開始から50周年を祝し、2月に首都チュニスで日本祭りを開催しました。隊員の皆さんも、配属先の青少年と共に日本の踊りや日本語スピーチコンテストを実施したり、聴覚障害児による劇を企画したりとイベントを盛り上げてくれました。会場にはチュニジア人約2,000人以上が来場して熱気にあふれ、現地の人々が日本にとても友好的で高い関心を寄せてくれていることを嬉しく感じました。

協力隊派遣開始当初は医師も含めた保健医療分野のほか、電子機器や自動車整備といった職業訓練分野など専門職種の派遣が中心でしたが、社会・経済の発展に伴い職種が多様化。スポーツや地方での農業、福祉の分野へと広がりました。2000年代以降は経営、工業分野といった専門性の高いシニア海外ボランティアが大半を占めた時期もあります。15年のテロ事件後の約4年間の派遣中断、コロナ禍による一斉帰国を経て、現在は、青少年活動や音楽、スポーツ、障害児・者支援などの隊員が、首都にアクセスしやすい沿岸部で活動しています。今後は、都市部との経済格差が大きい南部地域への派遣も検討していく方針です。

チュニジアで活動する際は、自分の考えを言葉にして相手に伝えることが大切だと思います。困り事や不満があっても遠慮しがちな日本人と対照的に、チュニジアの人々は気持ちを率直に主張するのですが、言い争いになっても根に持たず、明るく陽気な国民性です。思っていることを自分の中にため込まず、拙い語学力でも一生懸命話せば、きっと受け止めてくれるでしょう。

チュニジアは豊かな文化も魅力的な国です。アラビア語のチュニジア方言の朝の挨拶一つ取っても、「スベールヒール（良い朝）」の他に「光の朝」「花の朝」「ジャスミンの朝」「デーツとミルクの朝」など詩的な言葉を交わします。隊員の皆さんには、好奇心を全開にして新たな文化を学んでほしいですね。

チュニス湾を見下ろす断崖の上にある町、シディ・ブ・サイド。観光地として名高く、アラブ建築やアンダルシア建築が組み合わされた白い壁と青い扉の住宅が地中海に映える

職業訓練、障害者福祉、スポーツ分野で専門のスキルを生かして チュニジアの期待に応える隊員たち

“ハイテク日本”からの隊員として 向上心ある生徒たちに電子技術を指導

八角幸雄（はっかくゆきお）さん
チュニジア／電子機器／
1975年度1次隊後期組・千葉県出身

PROFILE
大学卒業後、千葉県庁に技術職（電気技師）として2年間勤務した頃、通勤電車内で協力隊員募集の広告を目にし、技術を生かして海外に貢献したいと協力隊に参加。帰国後もJICA専門家としてチュニジアに家族同伴で3年間赴任。その後外務省に入職し、本省および在外公館に勤務。通算25年ほどをモロッコ、セネガル、コンゴ民主共和国、ベルギーなどフランス語圏の各国で過ごす。退官後の2012～20年は千葉県JICA協力隊を育てる会の理事を務めた。

1975年、チュニジアへの協力隊派遣は看護師隊員の女性2人から始まり、半年後に男性隊員第1号となる電子機器隊員の八角幸雄さんが派遣された。元々はラオス派遣の予定だったが、日本での訓練期間が終了する間際、隣国ベトナムでの戦争激化の影響を受けて派遣中止となり、チュニジアへ任国を変更することになった。

「訓練期間中に学んだラオス語が役立てられないことになり、どうせなら、まったく予備知識のない国へ行ってみようと、同じ職種の要請があった中から国名さえ知らなかったチュニジアを希望しました」

首都チュニスに赴任した時の印象は、「とても都会で、南フランスの避暑地のように美しい街でした。生活についても不自由なく、人々の意識は高く、マナーも良かったです」と振り返る。配属先は電気・電子技術職業訓練センター。この国で最も歴史ある職業訓練校で、高校を卒業して入学してきた生徒たちに、電子機器について教えることになった。

「ラオスでは放送機材のメンテナンスをする技術者としての要請だったため、電気技師としての経験が生かせると思っていましたが、チュニジアではフランス語で、経験したことのない教員をしなければなりません。訓練所で1カ月しか教わっていないフランス語で理論を講義するのは難しかったため、実技を中心に教えることにしました」

教材用の電子機器などを使い、英語の技術用語を交えながら、基礎的な仕組みを教えることからスタートした八角さん。最初は簡単なラジオの組み立てなどを、最終的にはカラーテレビの修理までを指導した。「語学力の向上に励みながら、必死で授業を行っていました。その結果、生徒が教えたことを理解してくれるようになった時は、嬉しかったですね」

電気・電子技術職業訓練センターの実習室。八角さんはカラーテレビの仕組みや修理方法などを教えた

八角さんは職業訓練校の生徒や教員たちとチュニジア各地を旅した。写真はチュニジア最大のローマ遺跡であるドゥッガ遺跡を訪れた時のもの

日本の家電メーカーが次々と革新的な製品を発売し、海外への輸出が活発だった当時、チュニジアでも“ハイテク日本”というイメージが浸透していた。

「生徒たちは先端技術を知りたいと積極的に質問してきました。チュニジアでは知識や情報がフランスから入ってくるため、私が教えることをフランスの技術と比較して、『やはり日本はすごいんだな』と認識したようでした」

八角さんは、生徒や教員たちが日本を高く評価してくれることに嬉しさを覚える一方で、「文化的に開発途上にある国に、技術を教えに行くと思っていましたが、そうした意識は間違っていたと感じるようになりました」。

チュニス旧市街にある巨大な石門、中部の町エル・ジェムにある円形闘技場など、古代ローマ帝国の名残をとどめる遺跡の数々を訪ねた八角さんは、特に紀元2世紀に造られた世界最長の水道橋の設計と建設技術に感嘆した。

「ローマ文明をはじめとする地中海世界の歴史を感じ、日本とは異質な文化の荘重さに圧倒されました」

八角さんの活動は高く評価された。帰国後にもチュニジア政府からの要望でJICA専門家として同校に再赴任し、3年間、教育のレベルアップを図った。チュニジアでの活動経験はその後、外務省職員としての25年にわたるフランス語圏勤務へとつながっていく。

「日本ってどんな国？」と聞いてくる子どもが多かったため、日本文化紹介の一環として皆でひな人形を作って浴衣を着つけた。「子どもたちに自分の好きな色紙を選んでもらい、自由に表現してもらいました」（霜鳥さん）

霜鳥千佳子（しもとりちかこ）（旧姓 齋藤）さん
チュニジア／青少年活動／
2009年度4次隊・千葉県出身

PROFILE
大学の福祉学科で学び、保育士の資格を取得。子どもの頃から海外に憧れ、児童養護施設で4年、子ども交流館で1年の経験を積んだ後、協力隊に参加。2010年3月～11年1月までカスリン県フェリアナにある聴覚障害者施設で活動するも、「アラブの春」の影響で一時帰国を余儀なくされた。その間、東日本大震災の被災者避難所となった二本松訓練所でボランティアを行う。11年5月～12年7月に再赴任し、配属先をケルアン県の聴覚障害者施設に変更して活動。現在は民間の療育施設で児童発達支援に携わっている。

「今の自分があるのは協力隊のおかげだと感謝しています。日本だけが世界ではありません。多くの方々に、協力隊に参加して視野を広げてほしいですね」

聴覚障害者支援施設で図工やダンスを教え、子どもたちから笑い声を引き出した

2010年から中東地域に広がった民主化運動「アラブの春」。そのきっかけはチュニジアの「ジャスミン革命」だ。12月、内陸部のシディブジド県で失業中の若者が焼身自殺したことが引き金となり、当時のベン・アリ政権に対する抗議運動が発生した。

政情混乱を受け、隊員たちは日本に一時帰国した。その一人が、焼身事件が起きた県に隣接するカスリン県の聴覚障害者支援施設に赴任していた青少年活動隊員の霜鳥千佳子さんだ。日本に帰国して約4カ月後、任地が変更となり、5月にチュニスから南に160㎞ほどのケルアン県にある聴覚障害者施設に再赴任した。

配属先では、聴覚障害児・者が幼児・小学・中学の各部に分かれて基礎教育を受けたり、経済的自立のために職業訓練に取り組んだりしていた。霜鳥さんは、情操教育を行うという要請に基づき、幼児部・中学部を対象に、手先を使って自由に表現する図工やダンスを教えることになった。

ところが同僚の先生たちは「チュニジアは援助を受ける国ではない」とプライドが高く、教育方針は保守的だった。例えば図工の授業では、塗り絵は見本と同じ色に、絵に線を引くときは定規を使うなど、先生の指示どおりの作品を作ることを良しとしていた。「私が行う自由な表現を重視した授業は“遊び”と捉えられ、それよりもアラビア語や計算について学習することが大事という考え方でした」。

そこで霜鳥さんは一部のクラスで時間をもらい、図工に“学び”の要素を取り入れるようにした。時間の読み方を教わっているクラスではオリジナルの時計作りを、数の数え方を習っている子どもたちには切った紙が何枚あるかを数えるゲームなどを取り入れた。

ある日、発声がなかなかできない聴覚障害の子どもたちに、息を吹くことに慣れてもらおうと、折り紙の風車作りを教えたところ、子どもたちは息を吹きかけて風車を回し、声を出して笑った。教室に響く笑い声を聞いて先生たちが集まり、「初めて笑い声を聞いた、こんなに笑うとは！」と驚いた。その後は先生たちも自由な表現の大切さや教育効果に理解を示してくれるようになった。

悩みは、先生たちに一緒に授業をしてもらえないことだった。放課後は同僚の先生たちが、「一人で家で過ごすのは寂しいでしょう」と日替わりで家に招いて夕食をごちそうしてくれるほど仲良くなったが、霜鳥さんが授業を始めると教室からいなくなってしまう。もどかしさを抱えながら教室で後片づけをしていると、一人の先生から、「あなた、お掃除係の仕事を取るの？ あなたが掃除しちゃうと、あの人クビになるよ」と言われた。チュニジアには各人に与えられた役割を他人が邪魔してはいけないという文化があり、それは自分の授業にも当てはまるため、先生たちが教室に来ないのだとようやく理解した。

霜鳥さんは自分のチュニジア方言の拙さを逆手に取り、「助けて！ 私の語学力では子どもたちに伝えられないから一緒に来て」と先生を巻き込むようにした。そうして一人だけで授業をすることは減っていった。「私の帰国後も、子どもたちの個性や表現力を引き出す授業をしてほしくて、先生たちに教えることの喜びを伝え続けた1年でした」。

選手たちの感情コントロールを大きな課題に 応援をもらえるプレーができるよう指導

2023年7月から派遣されている卓球隊員の城間春香さんは、地中海沿いでブドウの産地としても有名なナブール県にある女子卓球クラブ「グロンバリア金のぶどう協会」で6歳から17歳の選手の指導をしている。

配属先はチュニジア卓球連盟傘下の全国に45ある組織の1つで、約40人の選手が所属。練習場は市から提供された専用施設で、道具などは協会から貸与されており、遠征費も関係者からの寄付で賄われるという恵まれた環境だ。

同僚コーチ2人は30年以上の卓球経験があり、東京五輪の出場選手も輩出してきた。そんな高レベルの協会で、ナショナルチームに参加できる選手を育成することが城間さん

城間春香さん
チュニジア／卓球／2023年度1次隊・沖縄県出身

PROFILE
卓球選手だった父の影響で6歳から卓球を始め、大学ではスポーツ科学を専攻する傍ら、九州学生大会で個人・ダブルス・団体の各戦で優勝。卒業後は大学に助手として勤務し、卓球部のコーチを担当した。子どもの頃から海外に興味があり、大学生の時、サッカー隊員として活動した協力隊OVの先輩の話を聞いたことがきっかけとなり、卓球の知識と経験を生かして貢献したいと協力隊に参加。

グロンバリア金のぶどう協会で卓球に打ち込んでいる選手たち。チュニジアへの卓球隊員派遣の歴史は長く、約40年にわたって多くの隊員が技術だけでなく礼儀や正しい心構えを指導してきた

に求められている。練習は火曜から土曜の8時～10時と15時～17時の2部制で行い、日曜には公式試合にコーチとして帯同し、試合中のアドバイスなどを行う。

城間さんが試合を見て驚いたことが、配属先のチーム、相手チーム共に選手がしばしばイエローカードによる警告を受けていることだった。打ち返せなかった時に怒りをあらわにするほか、卓球ではネットインやエッジボール（※）で得点した時は謝るのがマナーだが、謝らない選手もいるため、それに対して怒ってラケットをたたきつけたり、ボールを蹴ったりして“バッドマナー”として反則を取られるのだ。

卓球を通じて礼儀や規律を学び、数々の大会で上位の戦績を残してきた城間さんは、「まだ勝てる可能性があるのに試合途中で諦めて負けてしまう選手も多かったため、感情のコントロールが大きな課題だと思いました。礼儀正しいプレーや一生懸命に試合に打ち込む姿は応援したくなりますし、団体戦でもチームが一丸となり、良い流れをつくってくれるものです。だから、チームメイトからも、観客からも心から応援してもらえる選手になってほしいのです」。

道具を粗末に扱う選手がいれば、「限られた道具を大切にしよう」とその場で注意し、試合では「対戦相手へのリスペクトを忘れずに」と言い続けると、徐々に態度を改めるようになった。さらに「選手自身が目標を立て行動する力」を身につけてもらうため、それぞれの選手が大会に向けて目標を立て、そのために何をすべきかを考えさせる指導も実施。達成できると、さらに上の目標を持たせるようにした。

一方、今まであまり時間が割かれていなかった選手たち個々の課題や練習メニューの改善点について資料にまとめ、同僚コーチと3人で話し合う機会を設けて実践につなげた。

こうした積み重ねが実り、24年のシーズンは、団体戦で15歳以下が銅メダル、11歳以下が8位と成績を上げ、また自らも選手として参加した一般部門の団体戦では全国優勝を果たした。結果、12歳以下のナショナルチームに3名の選手が選ばれ、3月に行われた合宿には城間さんもコーチとして参加した。合宿で行われた試合では、以前は勝てなかった相手を破る選手、負けたものの最後まで真剣に試合に挑む選手の姿があった。イエローカードも見られなかった。

「残された任期で、選手たちが昨シーズン以上の成績を目指して努力し、最終的には優勝できるようサポートしていきたいと思っています」

※ネットインやエッジボール…卓球で打ったボールがネットに触れて相手コートに入った場合を「ネットイン」、台の角やふちに当たった場合を「エッジボール」と呼び、どちらも正しいリターン（返球）として得点になる。ただ、ボールが不規則に跳ねるため非常に打ち返しにくく、得点した側が手を挙げて相手に謝罪することが一般的マナーになっている。

活動の舞台（裏） ― 多様な自然・文化や古代遺跡が特色

チュニジアの自然の魅力について、「狭い国土ながら、地中海沿いのリゾート地や、内陸部のなだらかに連なるオリーブ畑。砂漠、そして雪が降る地域もあって、さまざまな風景が見られる国です」と話すのはJICAチュニジア事務所の相澤葉子さん。

「南部の砂漠に近い地域には、映画『スター・ウォーズ』の撮影地として有名なマトマタの竪穴式住居や、タタウィンのクサール（穀物倉庫）があり、初めて見た時は本当に地上の風景なのかと思いました」

世界文化遺産として有名なのが、3世紀に建てられたエル・ジェムの円形闘技場で、最大3万5,000人が収容できる大規模建築だ。八角幸雄さんは、「巨大建築を実現し、当時の人々が娯楽場として楽しんでいたと思うと、日本とは違う文明なのだと驚嘆せざるを得ません」と讃える。城間春香さんの任地からは電車で3時間ほど。「夏の夜に闘技場で行われたコンサートに行った時は、ライトアップが幻想的でとてもすてきでした」。

左：チュニジア南部のタタウィン周辺には約150のクサールが残されている。写真はクサール・ウレドスルタンで、16～17世紀にかけて築かれたといわれる
上：直径最大148mの楕円形で4階建てという巨大なエル・ジェムの円形闘技場。夏に行われたコンサートの様子

お悩み相談
アドバイスを聞きました！

今月のお悩み

障害のある生徒たちに体育を指導していますが、前向きに取り組んでくれない子が多く困っています

（障害児・者支援／マレーシア）

特別学級で、障害のある生徒たちに体育を教えています。基礎体力をつけるため、マット運動などをさせたところ、「そんな動きはできない」「面白くない」などと前向きに取り組んでくれません。一人ひとりの障害の種類や程度も違うので、どう指導したらいいのか迷ってしまいます。生徒たちにやる気を出してもらう方法はあるでしょうか？

齊藤先生からのアドバイス

思った動きができないことは生徒のストレスになります “ステップ化”により小さな達成感を与えていきましょう

障害がある子・ない子に限らず、運動が得意な子と不得意な子がいます。苦手な子にとって、やろうと思ってもできないことをやらされることは苦しく、体にハンディキャップがあるとなおさらです。周りの子にできることが自分にはできないという状況も大きなストレスになりますし、できるまで同じことを何回も練習させられると嫌になってしまいます。

できないことには理由があるはずで、筋力が足りない、柔軟性が足りない、上肢と下肢を同時に動かすのが苦手など、障害や特性はそれぞれです。生徒をよく観察して、どういう動きならできそうかを考え、できる範囲から始めるとよいでしょう。それには運動を“ステップ化”することが効果的です。

日本での例になりますが、跳び箱であれば、低い跳び箱やタイヤ跳び、あるいは馬跳びなど、類似運動で飛び越す感覚を習得してもらうステップから始めることなどがあります。

ステップ化のアイデアの引き出しは多いほどよく、現在はインターネットなどで具体例が見つけられるでしょう。体系的な体育授業を経験してこなかった子が多いと思われる途上国では、日本以上に意識してステップ化を取り入れるとよいと思います。難し過ぎず、簡単過ぎないちょうど良いステップを設定できるかどうかが、指導者の腕の見せどころです。

この方法のメリットは、生徒に「小さな達成感」を積み重ねてもらうことができる点です。ステップ化された動作ができた時は、「今日はこれができたね」と声かけをしてあげることで、生徒は自己肯定感や達成感を感じられますし、「次のステップにも挑戦してみたい」と前向きに取り組んでくれるようになるでしょう。また、周りの生徒とではなく、自分との勝負ですから、皆、それぞれが平等にチャレンジすることができます。

ほかにアイデアとして、目標をクリアしたらスタンプを押していく、頑張った生徒に賞を出す、といった方法が効果的だったという例もあります。運動に楽しく親しむ経験は、その生徒が大人になってからも財産になることです。ぜひ小さな達成感を感じてもらいながら、活動を続けてください。

今月の先生
齊藤一彦さん
シリア／陸上競技／1993年度1次隊・山口県出身

広島大学大学院人間社会科学研究科教授。教員を目指していたが、人と違う経験を積みたいと大学卒業後、協力隊に参加。シリアで陸上競技の指導を行った。スポーツが人間の内面に与える影響などに関心を持ち、大学院へ進学。JICA客員研究員、日本学術振興会特別研究員などを歴任。専門はスポーツ教育学、スポーツ国際開発学。

Text＝三澤一孔　写真提供＝齊藤一彦さん

スポーツ感覚で
環境意識を高める
日本発祥の“スポGOMI”をボリビアで実践

なかじま ひろし
中島 博さん
ボリビア／環境教育／2023年度3次隊・群馬県出身

取り組んだのは？

スポGOMI

一般社団法人 日本財団スポGOMI連盟が提唱する、「スポーツ」と「ごみ拾い」をかけ合わせた競技。ごみ拾いをスポーツ的に捉え、楽しみながら参加することを通じて廃棄物問題に関する意識を高める趣旨で、3～5人のチームで集めたごみをポイント化して得点を競う。単に拾った量を評価するだけでなく、ペットボトルやビン・缶などの種類別に得点が異なるため、参加者が自然に分別を行う仕組みになっている。

ボリビア第3の都市・コチャバンバ市で、環境教育隊員として市役所の廃棄物管理課で活動している中島 博さんが力を入れているのが「スポGOMI」だ。2024年3月に着任した当初はその存在すら知らなかったが、活動開始から3カ月ほどたった頃、上司であるボリビア人の課長から「こんな手法があるらしいよ」と教えられ、すぐに「やってみたい！」と感じたという。「元々、自分だからできること、日本人だからできることをしたいという思いが強くありました。スポGOMIの存在を知り、日本発祥であること、そして私自身が好きなスポーツの要素もあることに引かれ、なんとしてもやりたいと思ったのです」

調べてみると、隣県の山間部のバジェグランデ市に事務所を置く日本のNPO法人DIFAR（※）がすでにボリビアでスポGOMIを実践していることが判明。JICAボリビア事務所を通じて代表の瀧本里子さん（ボリビア／野菜／2000年度2次隊）にコンタクトを取り、さっそく6月に2泊3日の研修に参加させてもらった。実際に競技の様子を見ると、開会式の後には運動会で定番の選手宣誓やラジオ体操といった日本らしい要素が取り入れられていて、しかも市内の学校の先生たちが率先して動いているなど地域に根づいた活動になっていることに感銘を受けた。

ボリビアの都市部は行政の清掃サービスがかなり行き届いているが、リサイクルできる物とできない物を分ける意識が市民に浸透しておらず、大量のごみで処分場の許容量が限界に

地域住民向けの説明を行う中島さんたち。相棒となった同僚が学校などもどんどん訪ねて協力依頼を進めてくれるので助かったという

スポGOMI当日、ごみを拾い集めるチームメンバーたち。高校2年生が競技に参加し、3年生が各チームに1人ついて審判役を務めた

大盛況に終わった大会。2025年には世界大会に向けた予選を計画中だが、市内での政治的なデモに起因する延期を余儀なくされるなど、現地ならではの課題にも直面している

達しつつある。スポGOMIを通じ、ごみの分別方法やリサイクルの重要性を学んでほしいというのが中島さんの狙いだった。

研修から戻ると、中島さんはすぐに所属する廃棄物管理課の同僚7人に「スポGOMIとは何か？」というプレゼンを行った。反応はさまざまだったが、課長が、行動力のある同僚を選んで中島さんと共にプロジェクトリーダーに任命してくれた。9月14日が「コチャバンバの日」という祝日で、8月15日からの1カ月間が市内清掃の強化月間となっていたことから、その間の8月29日に大会を開催することが決まった。

まずは開催場所を決めるための調査から始めた中島さんと同僚。路上ごみの有無や交通の安全面などを考慮し、市内西部にある湖のほとりでの開催を検討した。そこで近隣の高校2校の校長に学生の参加を打診し、快諾を得ることができた。

次に、大会開催にあたっては、ステージや音響設備、救急車、交通警備員の配置など、市役所の関連部署の協力が必要となるため、開催場所の区長や関係部署を集めた会議を開き、協力を仰いだ。8月に入ると、高校の校長経由で町内会や保護者会に働きかけ、地域住民の理解も得た。

「関係者が多いので、事前の調整が重要でした。関係各所に話をする時は役所用、地域住民用など、相手に応じたスライド資料を用意して、毎回『スポGOMIとは何か？』という話から始めて説明を重ねるうちに、だいぶプレゼンが上達しました。開催予定日が清掃強化月間中だったので、公的に決まっていることだと強調し、開催が決まっている前提で話すようにしたほか、資料に“日本発祥”と入れたことで、現地の人の関心を引きやすくなったと思います」

開催に向けた段取りがついたところで、協賛者の募集にも動いた。「ボリビアではイベント主催者が飲食物を用意するのが一般的なのですが、市の予算がなかったため、企業に支援を求めることになりました」。

そこで力を発揮したのが、一緒に取り組んでいた同僚だ。日本米の卸売業者や日本食レストラン、外資系スーパーといった企業に協賛を募ることを提案し、最終的に9社から米やパン、飲み物などの食品を提供してもらえることになった。

開催に向けて苦労したのは、配属先の課から市役所の各部署や企業へ正式に協力依頼をしても一向に返答が来ず、期限が過ぎることが何度もあったことだった。

「期日が過ぎても関係各所からの回答がなく、何度も催促するのが大変でした。大会の前日ギリギリにやっと回答をもらえたケースもありました」

しかし、最大の危機は開催1週間前のこと。開催予定地の湖に植林業者が入ることになり、湖一帯が突如封鎖されてしまったのだ。急遽、近隣にある屋根つき広場を中心とした街路で実施することに変更したが、「開催場所を変更したことで警備計画の再考が必要になり、別の町内会の管轄になったことで混乱も生じ、一時は開催が危ぶまれる事態になってしまいました。夜遅くに町内会長の自宅を訪問し、顔を合わせて説明を尽くすことでなんとか納得してもらうことができました」

前日には、課の同僚たちに担当者リストを渡して各持ち場の責任者を明確にしておくと共に、当日の流れを最終確認した。そして迎えた8月29日、コチャバンバ市初のスポGOMI大会には高校生117人が参加して、開会式から閉会式まで大いに盛り上がりを見せた。競技には4人1組の合計16チームが出場し、所定の30分間で総重量135kgのごみを集めて戻ってきた。その中で、カウントされないごみを除く10.8kgを拾ったチームが優勝となり、1～3位が表彰された。

「ごみのカウントなどで待機となる合間には、他の隊員にソフトボール体験会を実施してもらったり、協賛のお米でおにぎりを作って提供したりしました。高校生も分別の方法や重要性を理解してくれ、課の皆からも素晴らしいとの感想がありました」

今年は34カ国が出場予定の「スポGOMIワールドカップ2025」が日本で開催されるため、それに向けてボリビア国内でもDIFARが主催となり、協力隊員らの支援の下、予選大会が進められている。中島さんはこれを機にスポGOMIを定期開催し、ボリビア全土に広げていきたい考えだ。

「環境問題やごみの分別は座学で教えるとどうしても受け身になってしまいます。スポGOMIは体を動かして楽しみながら環境意識を高められるのが一番の魅力です。予算がなくても、最低限ごみ袋さえあればできるので、どこの国でも実践しやすいのではないかと思います」

※NPO法人DIFAR…ボリビアの農村地域で環境問題に取り組む団体で、廃棄物管理の提言、リサイクル推進、環境教育プログラムの普及活動などを行っている。バジェグランデ市を対象とした草の根技術協力事業を2012年から実施中。

特集 日本人だからこそできるコト！

日本を生かした活動あれこれ

協力隊員にとって、派遣先のコミュニティに溶け込んで、現地からさまざまなことを学んで取り入れるスタンスは、活動の重要なポイントといえます。一方で、日本から来たボランティアとして、日本人ならではのアイデアを提供することも、現地社会に貢献する上では大切でしょう。今回の特集では、日本の知見や日本らしいテーマを現地で生かした隊員たちの事例を紹介していきます。

Text＝秋山真由美　写真提供＝ご協力いただいた各位

モンゴルの理学療法の課題に挑む試み

日本の理学療法ガイドラインを翻訳・提供

久保田 凌（くぼた りょう）さん（写真右から2番目）
モンゴル／理学療法士／
2019年度1次隊、2022年度7次隊・青森県出身

取り組んだのは？

日本理学療法士協会による ガイドラインの活用

理学療法士の職能団体として1966年に設立された日本理学療法士協会では疾患・外傷の種類や患者の条件に応じてエビデンスに基づく治療や評価の指針となるガイドラインを取りまとめている。オープンソースとしてインターネット上でも公開されており、久保田さんは協会の許可の下、これをモンゴルの医療現場で活用することを試みた。

学生時代から海外に興味があったという久保田 凌さん。親の勧めで理学療法士の資格を取得して4年間臨床経験を積み、協力隊員として2019年7月にモンゴルへ赴任した。首都ウランバートルにあるウヌ・エンフ神経リハビリテーション病院に派遣されたが、赴任してみるとモンゴルのリハビリテーション（以下、リハビリ）の現場は思いがけないことばかりだったという。

「日本で理学療法士の資格制度が誕生したのは60年も前ですが、モンゴルでは07年に群馬大学とモンゴル国立健康科学大学が理学療法士の教育課程を立ち上げたばかりで、まだまだ歴史が浅い状況です。理学療法士隊員を受け入れる病院側にも理学療法士に対する知識が乏しく、私の配属先も、日本であれば施設基準も満たしていない状況でした。いわばシェフとして店に勤め始めたのにキッチンがないような状態で、最初はあぜんとしました」

配属先は主に脳卒中や脊髄損傷などからの回復期にある患者を受け入れていたが、モンゴル人の理学療法士はたった1人。温熱療法のような物理療法やマッサージなどの伝統療法に基づいた治療が中心で、リハビリについて適切な助言はできていないようだった。

「医師や看護師との連携が不十分で、医師の診断結果を基にリハビリを実施するにも課題があって苦労しました。医療現場ではちょっとした判断ミスが患者さんの生死に直結するため、さまざまなリスクを考慮し慎重に対応する必要がありました」

さらに赴任3カ月目に、勤めていた理学療法士が辞めるという出来事が起きるなど、慢性的な人手不足の状況もあった。

「人員が乏しい中、今後を見据えて、指針とすべきガイドラインなどを共有して残しておく必要性を強く感じました」

そこで久保田さんは病院での活動の合間を縫って、日本理学療法士協会のガイドラインを翻訳することを思い立つ。念のため日本理学療法士協会に問い合わせて、翻訳と現地への提供の許可も得た上で、まずは自分一人でもできる英訳から始めることにした。

理学療法に従事する人員に対して患者数が多い状況下、比較的軽度の患者にはモンゴル語に訳したガイドラインの一部を渡し、自らリハビリに取り組んでもらえるようにした

現地の患者がリハビリに取り組む様子を確認する久保田さん

北海道大学の医学生が配属先を訪問した際には院内を案内し、モンゴルの医療についての情報共有などをした

「医療分野の専門用語ばかりで、分厚い本2、3冊分のボリュームがありました。今のようにパソコンやスマートフォンの翻訳機能が充実していなかったこともあり、翻訳に半年くらいはかかりましたね」

苦労して翻訳したガイドラインだったが、病院に共有してもファイリングされて目立つ場所に飾られたまま、同僚たちが目を通す気配がないことに閉口した久保田さん。英訳したものの中から、特にモンゴルの現場で重要度の高い症例だけ抜粋して同僚の協力の下でモンゴル語に訳し、退院指導の現場などで使えるように図った。

「同僚に共有するだけでなく、必要箇所だけプリントしたものを患者さんに渡すことで、在宅でのリハビリなどの参考にしてもらえたことは、一定の意義があったと思います」

ガイドラインに関する試みと並行して、日本の病院現場のようにスタッフの間でスケジュールの共有ができるようにも働きかけた。

「日本では患者さんの情報やスケジュールを理学療法士と医師や看護師の間で共有するのが当たり前ですが、モンゴルではその観念がなく、みんなバラバラに動いていました。特に管理ツールの類は使わず、とにかく口頭で、『何時から診察』『何時に点滴』といった情報を地道に共有し続けました。すると、徐々にスタッフ間でもスケジュールを事前に確認し合う習慣がついていきました」

課題は他にもあった。ある時、変形性膝関節症と診断された患者に対する治療を見た同僚が、それから膝に関する疾患を持って来院する患者すべてに対して、同じ治療を行うようになってしまったという。

「同じ膝の疾患でも、その症状を根本から治療するための“臨床的推論思考”がモンゴルでは定着していないことを肌で感じた瞬間でした。これは養成の過程で現場での実習を経て培われていくもので、既存のガイドラインで展開されている治療はそれらを前提として作られています。理学療法の歴史が浅いモンゴルでは、実習現場を担当できる療法士が不足していることが同僚の治療からも感じられました。同様の経験は他の理学療法士隊員からも多く寄せられ、医療現場ではなく教育現場に隊員を派遣することがより効果的なのではないか？と話し合うことも多々ありました」

さらに、モンゴルの医療制度では入院期間が原則14日間までという制約があり、患者に対する継続したリハビリの実施が困難だった。久保田さんは、退院後に注意すべき事項、自己管理方法、今後起こり得るリスクなどをできる限り患者に伝えるようにして、医師だと勘違いされるほどに信頼を得たが、一方で、モンゴルの医療現場で1人の理学療法士ができることの限界を感じるようにもなっていった。

コロナ禍による一斉帰国を経て、22年6月に再赴任した時には、日々の活動の中で脳卒中における装具の重要性を再認識し、最後の半年間は実地調査に力を入れた。他の病院にも赴き、リハビリの実施状況や装具の認知度などについてアンケートを実施し、調査結果をモンゴル国看護学会にて発表した。

日本のガイドラインを導入しようという試みを通じて、現地が抱える構造的な課題を改めて認識した久保田さん。それらを解決するためには、政策から変えていかなければならないと考えるようになり、任期中に在学していた大学院を修了した現在、国際協力分野に進路を定めている。

「理学療法のガイドラインも本来はその国の状況に合わせた形でなければいけませんし、他方で現地の社会保障制度や教育環境を整備するアプローチも必要です。これはモンゴルだけではなく、他の途上国も同じこと。今後は国際協力の立場からこれらの課題や政策について提言していきたいと思います」

元横綱の日馬富士が現地に設立した学校で、日本へ留学予定の学生たちに向けて日本の医療制度について講義した

平和展の会場の様子。原爆投下にまつわるパネルは、JICAルワンダ事務所にあったものを使用することができた

ヒロシマ・ナガサキの“今”を伝えたい

ルワンダで平和展を開催

田川統子（たがわすみこ）さん（写真右）
ルワンダ／コミュニティ開発／2018年度1次隊・長崎県出身

取り組んだのは？

ヒロシマ・ナガサキの平和展

広島県・長崎県から派遣される協力隊員は赴任前に、それぞれの地域のJICA拠点などが実施する平和学習や被爆者講話を受ける機会がある。これに影響を受けるなどして原爆展・平和展を開催する隊員もおり、世界各地でヒロシマ・ナガサキについて伝えることに貢献している。

「今も人が住めないんでしょう？」。被爆地である長崎県に生まれ育ち、地元の金融機関を経て協力隊員としてルワンダに派遣された田川統子さんが、現地の人々から幾度となく投げかけられた言葉だ。ルワンダの首都キガリからバスで約3時間の東部県ンゴマ郡庁に赴任したのが2018年。初対面の人や道行く人と話していて、自分が日本の長崎から来たことを話すと、「I'm sorry」と気の毒そうな顔で、前出の言葉を投げかけられた。

「作物が育たないんでしょう」「何もない原っぱなんでしょう」「手足のない人がたくさんいるんだよね」といった言葉の数々に、「いや、今はそんなことないよ」とやわらかく否定していたが、そうしたやり取りは何度も続いたという。70年以上も前の出来事であり、何より自分は現にこうして元気なのにもかかわらず、なぜいまだに当時のままのように言われるのかと、モヤモヤが募っていた。そんな中、同じ長崎県出身のルワンダ隊員から平和展を一緒にやらないかと誘われたのが19年6月頃のことだった。

「正直、自分が平和展を開催するなんて考えてもみませんでした」と振り返る田川さん。長崎県民として小学校時代から毎年平和教育を受けていて、被爆者の話を聞く機会もあり、協力隊員としての派遣前には平和教育プログラムもあった。忘れてはいけない、二度と繰り返してはいけない歴史だと理解していたが、だからこそ自分がうまく伝えられる自信がなかったからだ。

それでも、現地の人から言われた言葉が頭をよぎった田川さん。ルワンダで原爆について知る人たちにとっては、学校で習う1945年のヒロシマ・ナガサキがすべてで、以降の知識がない。だとすれば、必要なのは“今”の広島と長崎を知ってもらうことではないか。「過去ではなく今に焦点を当てた平和展をしたい」。田川さんの提案に、平和展を発案した隊員も賛成してくれた。

開催日時は土日にしようと考え、8月6日と9日に一番近かった8月10、11日の2日間に決めた。場所はもう1人の隊員の任地だった南部の都市フイエにある、JICAの支援で建てられたばかりの施設。さらに田川さんの同期で広島県出身の隊員にも声をかけ、計3人となったメンバーはまず、FacebookなどのSNSを介して、“今の広島・長崎”をテーマにお気に入りの写真を広く一般に募集することから始めた。原爆投下時の写真はインパクトが強く印象に残りやすいからこそ、今回は原爆の悲惨さを伝えるのではなく、今の広島・長崎を見てもらいたいと考えた。

「条件はあまり指定せず、人、風景、物、場所や食べ物など、広島と長崎に関係があるお気に入りの写真を送ってくださいとお願いしたところ、たくさんの人たちから300枚以上の写真が集まりました」

その中から「明るい雰囲気が伝わること」と「ジャンルが偏らないようにすること」を意識して厳選し、50枚ほどに絞り込んだ。かつ、人が写っているものは使用許可も取った。

苦労したのは3人の任地がバラバラだったため、実際に集まって準備することができなかったことだ。

「LINEのグループをつくってそこでやりとりしていましたが、前日まで会場の下見もできませんでしたし、写真パネルの飾り方もほとんどぶっつけ本番でした」

企画書の提出やチラシの印刷、原爆に関するパネルの借用などのためにキガリのJICAルワンダ事務所に行く必要もあったが、3人ともキガリから離れた任地で活動していたため、誰かが上京した際に立ち寄るなど、連携して準備を進めていった。当日に向けた集客はSNSとチラシ配布を行ったほか、会場であるフイエにあるプロテスタント人文社会科学大学で長年にわたり平和構築について教えている佐々木和之氏を通じて、同校の学生に呼びかけるなどした。

開催前日は、メンバーの1人、広島県出身の同期隊員が体調を崩し入院するというハプニングがあり、2人だけで会場作りを行うことになった。事前に厳選した写真は印刷して広島か長崎かがわかるように示してパーテーションの壁に貼り、英語で簡潔な説明文を添えた。

「原爆の悲惨さばかりが強調されないように、被爆者の写真はできるだけ少なめにしました。原爆がどういったもので、どんな被害をもたらすのかといった説明の後に、投下前・直後の街の風景とその1年後の街の風景、最後に現代の広島・長崎の写真50枚というように、人の動線に合わせてパネルと共に配置し、展示の流れをつくりました」

展示写真は事務所のプリンターを使用させてもらって印刷。直接パーテーションに画びょうやテープで貼るなど、予算を抑えて簡素にした

折り鶴のワークショップ。折り紙は、たまたま8月初旬にルワンダを訪れる予定だった日本人に持参してもらった

プリンターやパネルはJICA事務所で借りたほか、会場で流す動画には佐々木氏から借りたDVDとプロジェクターを活用するなど、極力予算を抑えた。さらに、会場の一角に折り鶴の体験コーナーを設け、千羽鶴の意味を伝えながら一緒に鶴を折るワークショップも準備。こうして開催にこぎ着けた「〈ヒロシマ・ナガサキの今を伝える〉平和展」には、現地の大学生や子どもたちなど、若い人たちが多く訪れた。

「みんな真面目で、とても関心を持ってくれる人ばかりでした。今の広島や長崎のことを知りたいと言ってくれ、授業で習った“ヒロシマ・ナガサキ”のままではない今の様子をわかってくれました。先の戦争やルワンダ大虐殺のことなど、私たちは学校や教科書で歴史上の惨劇を多く学びますが、その場所がどのように復興し、現在どうなっているのかは誰も教えてくれません。自ら知ろうとし、考えなければいけないのだという気づきにもなったのではないかと思います」

田川さんは帰国後、長崎県職員として地元への貢献のために尽力している。「私のモヤモヤした思いから始まった企画でしたが、もし平和展をやらずに帰国していたら、『ルワンダの人から長崎はまだ人が住めないと思われていた』という記憶だけで終わっていたかもしれません」と振り返る。ルワンダで広島と長崎の“今”を伝えたことは、過去が今と地続きであることを体感し、自分たちと来場者それぞれが、平和の意味を自分事として考えるきっかけになった。

「必ずしもイベントという形でなくても、普段から折に触れて周囲の人たちに長崎のことを話そうと思えば、もっと話せたのではないかとも思います。それでも、多くの人たちの協力で平和展を開催でき、とても良い経験になりました。助けてもらった分、私にできることがあればこれからも誰かの力になっていきたいと思います」

スキルや意欲で道を開く

就職ストーリー

ICTの知識と技術を活用し ビジネスを通して途上国に貢献したい

Text＝油科真弓　写真提供＝金澤範幸さん

今月の先輩

金澤範幸（かなざわのりゆき）さん

パプアニューギニア／コンピュータ技術／2016年度2次隊・大阪府出身

就職先　日本ミシュランタイヤ株式会社

事業概要　乗用車や二輪車、建設機械、農耕機械、航空機などの各種タイヤの開発・販売を手がけるほか、タイヤ点検やトラブル対応などタイヤに関連したサービスも展開する。

金澤範幸さんの略歴

1990年　大阪府生まれ
2012年3月　大学卒業
2012年4月～16年5月　SEとして一般企業に勤務
2016年10月　協力隊員としてパプアニューギニアに赴任
2018年10月　帰国
2019年1月　日本ミシュランタイヤ株式会社入社

高校時代にオーストラリアに留学したのを機に海外への関心が強くなり、将来は協力隊で開発途上国の人の役に立ちたいと考えるようになった金澤範幸さん。ICT分野の知識は必ず途上国で求められるだろうと、大学卒業後はシステムエンジニア（以下、SE）として一般企業に就職。知識と技術を身につけてから、コンピュータ技術隊員として協力隊に参加した。

配属先はイーストニューブリテン州の州都ココポにある公立高校。経済・社会的な発展度の高い同州内でも特に学力の高い進学校で、学内のICT化・ペーパーレス化を目指しており、金澤さんにはインターネット引き込みやコンピュータルームの移設・増設、学内の無線LAN環境の構築、カウンターパートの知識向上が期待されていた。3代目隊員ということもあり学校側の受け入れもスムーズだったが、教員らのセキュリティ意識が低いためにコンピュータウイルスがまん延していたことから、要請内容に加えてセキュリティに関するワークショップを実施するなど、ICT分野のリテラシー教育にも力を入れた。

帰国後の進路を考え始めたのは、任期の後半に差しかかった頃。任地での活動を続けていく中で、ICT4D（※）を学ぶためにイギリスの大学院に留学したいと思うようになっていった。ところが任期が終わるタイミングで、利用を検討していたJETRO（日本貿易振興機構）の大学院進学のサポート事業が終了。帰国後しばらくは留学か就職か決められずにいたが、最終的に大学院進学のハードルについて見直し、進路を就職活動に切り替えた。

採用情報を探すにあたり、金澤さんは2つの軸を決めた。一つは自身の経験を生かせるICT分野であること、そしてもう一つは、“自動車に関わる仕事”であることだった。「協力隊を経験して途上国では自動車が必要不可欠なライフラインであることを実感し、その業界に、強みであるICTを通じて関わりたいと考えました」。

配属先の教え子たちと共に着飾った独立記念日の様子

そこからの行動は速かった。すぐに転職支援サイトに登録し、紹介される企業に次々エントリーをしていった。日本ミシュランタイヤ株式会社もその一つ。海外経験を生かせる外資系グローバル企業であることと、面接で社内の雰囲気に好感を抱いたことなどが決め手となり、採用の通知を受けると、エントリーした他社の結果を待たずに入社を決めた。

「当社は途上国にもタイヤの供給を行っていますので、個人的な夢としては、ビジネスを通じて途上国に貢献していけたらと思っています」

入社から6年余り。協力隊時代に目指していた思いは、今も変わらない。

※ICT4D … ICT for Developmentの略で、ICTを活用した社会経済開発のこと。

1 帰国　2018年10月

帰国1カ月後くらいから就職活動を開始しました。転職支援サイトに登録し、ICTと自動車という2つの条件を満たす採用情報をエージェントに紹介してもらうというやり方です。エントリー先はおよそ60社に上ったと思います。

2 書類提出　2018年11月上旬

エージェントからの紹介に日本ミシュランタイヤのSE募集の情報があり、履歴書と職務経歴書、英文のレジュメ（経歴書）を提出しました。自己PRでは、自ら課題を見つけて対応する行動力をポイントに挙げました。協力隊の活動において、自身の知識を生かしながら、インターネットの引き込みを住民も巻き込んでプロジェクトの形で行ったこと、SE時代に培ったインフラネットワークの知識を生かして学内ICTの改善を行ったことなど、具体例を挙げながら記載しました。

3 1次面接　2018年12月上旬

1次は人事担当者との電話面接の形式でした。私が仕事をする上で大切にしていることは何か、協力隊でどんな活動を頑張ってきたかなどを聞かれました。やりとりでは、協力隊時代にプロジェクトを進める中で人と人との信頼関係を築くことの大切さを認識した経験を挙げ、その経験がグローバル企業である日本ミシュランタイヤでも生きるはずだと話したことを覚えています。

4 最終面接　2018年12月中旬

最終面接の日はそれぞれ40分くらいの面談が3回行われました。1回目では、人材開発担当者から私が会社でどのようなキャリアを望んでいるのかを聞かれました。2回目は情報システム部の実務担当者、3回目は同部のマネージャーとの面談で、これまでの実務経験から得た私の強み、経験と募集職種がマッチしているかの確認など、より実務に近い内容でした。英語力を確認するため、英語による質疑応答もありました。

採用決定　12月下旬

現在の仕事

今はマーケティング部でICTを活用したマーケティングに携わっています。当社は、卸業者や小売店をクライアントとするB to B（Business to Business）事業が主となるため、業者向け販売ポータルサイトの運用や、卸業者からタイヤを仕入れて販売する業者への拡販支援といったことを、デジタルの側面から行うのが私の業務です。外資系ということもあって社員一人ひとりが自らの業務の専属担当者となっており、同じ社内でもそれぞれが個人事業主のような働き方ですが、そこが面白くもあり、やりがいを感じています。

国内で開催された展示会のブースにて

後輩へメッセージ

協力隊時代は、大学院を経て国際機関に就職し、国際協力の世界で活躍する未来図を思い描いていました。結果的に就職の道を選んだのですが、その選択を面接でどう説明するか考えた時、ビジネスの視点でいうグローバルな成長と、社会発展を支援する国際協力のゴールは実は同じで、就職と進学のどちらを選んでも自分が目指すキャリアに通じている、という見方に至りました。選択肢は一つではないという視点を持った上で、帰国後の進路を考えてほしいと思います。

JICA海外協力隊ウェブサイト
「進路開拓支援のご案内」
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html

派遣から始まる未来

先輩隊員たちの社会還元

旧仏領アフリカの文学作品を翻訳・研究

村田はるせさん

ニジェール／保育士／1995年度1次隊・千葉県出身

Text＝新海美保　写真提供＝村田はるせさん

保育士からアフリカ文学研究の道へ
作品を通じて途上国理解の普及にも取り組む

「戦争で父親を亡くした少女が主人公の絵本」や「ルワンダのジェノサイドをテーマにした小説」など、フランス語圏アフリカ諸国出身の作家が手がけたさまざまな書籍を在野の立場で翻訳・研究する村田はるせさん。アフリカの多様な文化や社会について語り合う、月1回の「クスクス読書会」は今年で14年目を迎える。

アフリカ文学にのめり込んだのは今から30年前、協力隊でニジェールに派遣されたのがきっかけだ。短大卒業後、9年ほど東京都内の保育園で保育士として働いたが、「異なる文化の中に身を置いてみたい」と協力隊に応募。ニジェールの保育園で保育のプログラム作りなどに携わった。

子どもと接するのは楽しかったが、多い時には100人ほどの子どもたちを6、7人の保育士で世話することも。名簿作成や年齢ごとのクラス分けもままならず、保育士が給料未払いに対するストを起こしたり急に辞めてしまったりもして、「自分一人の力では限界がある」と感じた2年間だった。

「特に、同僚や母親など女性たちの考えや行動をなかなか理解できませんでした。夫の都合で離婚させられたりシングルマザーになったり、さまざまな困難を抱えていたと思いますが、深く聞けないまま日々が過ぎていきました」

そんな中、隊員連絡所で一冊の本を見つけた。セネガル人作家の短編集で、田舎から都会に出てきた農民の内面描写を通じ、現地の人々の物事の見方が垣間見えた。そして現地の慣習の下、意見や考えを自発的に語らない現地の女性たちの思いや葛藤が、少しわかった気がした。「文学は彼らの心の中を教えてくれる」。そう気づいた村田さんは、文学を通じてアフリカの人々をもっと理解したいと考えるようになった。

帰国後、復職・結婚を経て富山県へ移住。保育士の職を辞し、1998年に富山大学人文学部に進学した。フランス語能力を高め、フランス語で書かれたアフリカ文学を翻訳・研究するためだ。在学中に、コートジボワールを拠点に活動する作家、ヴェロニク・タジョさんを知り、その作品を読むようになった。「コートジボワール人の父とフランス人の母の間に生まれたタジョさんはアフリカ児童文学の発展に大きく貢献した人物です。彼女の取り組みの根底には、フランス人ではなくアフリカ人が書いた物語をアフリカの子どもに届けたいとの思いがあるそうです」。

現代に生きる伝統文化や社会問題、紛争などのテーマを、文学を通じて表現してきたタジョさんの挑戦に深く共感した村田さん。卒業後は東京外国語大学大学院に籍を置いて、アフリカの作家たちによる作品を読み込み、植民地時代から独立、現在に至るまで、彼らの視点から見た歴史や社会を研究した。「アフリカの作家であること」をテーマにタジョさんらの生い立ちや作品について考察した論文は日本では数少ない本格的なアフリカ文学論として評価され、村田さんは博士号を取得した。

2012年からは月1回、一般参加者を集めてアフリカについて学ぶ「クスクス読書会」を開始。本や報道などアフリカに関する情報を提供しながら参加者と語り合う時間を大切にしてきた。「人集めに四苦八苦した時期もありますが、『海外に出たい』『新しいことを知りたい』という人や研究者たちが参加してくれて定期的に続けています」。最近は、ノーベル平和賞を受賞したコンゴ民主共和国のデニ・ムクウェゲ医師の書籍を題材に開催して、紛争下で生きる女性たちの苦悩と、性暴力に苦しむ日本の女性とを重ねて議論を交わした。

「他者を通して自らを省みる。そのプロセスを積み重ねていくことが、生きやすい社会の実現につながるのかもしれません」と語る村田さんは、翻訳・研究の傍ら、絵本展も開く。西アフリカの出版社が発行した絵本を解説と共に展示する趣旨で、15年に富山市内の古書店で始めたのを皮切りに、20年のコロナ禍による中段も挟みつつ全国各地で9回開催。23年にタジョさんが来日した際は、講演会や読者との交流を手配し、滞在に付き添った。講演での「ジェノサイドは条件が揃えばどこでも起き得る」という彼女の警鐘は注目を集めた。

これまでに翻訳した絵本『アヤンダ』や小説『神（イマーナ）の影』は、いずれもタジョさんの作品だ。「モノに命が宿る世界観や、死者からの影響を受ける物語など、彼女の作品には見えないものを大切にする視点があり、それは日本人の心にも響きます。背景が理解できずうまく訳せない時もありますが、わかったフリはしない」と語る村田さん。これからも「わかろうとする努力」を諦めず、アフリカの人々の心情や背景にある社会と真摯に向き合っていく。

1 協力隊時代、活動先の保育園で保育士や園児たちと。「日によって来たり来なかったりする子もいて、全体の把握や管理という日本で当たり前のことすらできませんでした」 2 2015年に富山の古書店の一角を借りて絵本展を初開催。「いきなり店に行って『アフリカの絵本がすごく面白いので展示できないか』と相談したので、店長はだいぶ驚いたようです」 3 18年に日本で翻訳・出版した絵本『アヤンダ おおきくなりたくなかったおんなのこ』（ヴェロニク・タジョ著）。翌19年に同じくタジョさん著の小説『神（イマーナ）の影』を翻訳・出版 4 19年に出版社・作家への聞き取りでコートジボワールに渡航し、現地の作家ミシェル・タノン＝ロラさんと面会した際の一枚

村田さんの歩み

1986年　短期大学を卒業後、保育園に勤務

東京で保育士として働いていた当時、中国残留孤児のお孫さんとして帰国してきた子など外国につながる子どもと接する機会があり、文化や言葉が異なる人との向き合い方を考えるようになりました

1995年　協力隊員としてニジェールへ

JICA の技術協力プロジェクトの一環で、前任の協力隊員たちが立ち上げた保育園で保育士として活動しました

1997年　都内の保育園に復職

1998年　富山大学人文学部へ社会人入学

フランス語を訳せる力を身につけようと、結婚して移り住んだ夫の故郷・富山で進学。フランス語は協力隊以前の20代の頃から趣味で学んでいましたが、より深く学び始めました

2010年　東京外国語大学大学院で博士号取得

2012年　富山市内で「クスクス読書会」をスタート

2015年　絵本展開始。共著『アフリカ学事典』（昭和堂）出版

展示する絵本を刊行した西アフリカの出版社の人が語った「大人は子どもたちに本を読めというけれど、アフリカを描いた本がなければ、子どもは、自分たちは本にする価値がない存在なのかと思ってしまう。だからアフリカの子どもが登場する絵本を出すのです」という言葉が印象的でした

2023年　ヴェロニク・タジョさんの来日をサポート

東大の研究プロジェクトでタジョさんが招聘されて来日することになり、私も研究協力者として東京、京都、福島での講演や読者交流会などの準備に関わりました

2024年　詩集『気配』を自費出版

北陸現代詩人賞奨励賞を受賞。アフリカを前面に打ち出した詩集ではありませんが、アフリカ文学の影響を受けていると思います

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

REPORT

大阪・関西万博で JICA青年海外協力隊事務局プログラムを開催

4月25日（金）、大阪・関西万博のテーマウィークにおいて、青年海外協力隊事務局主催プログラム「世界と日本を変える力 ～JICA海外協力隊と外国人材と共に地域を創る～」を開催しました。

当日は、帰国隊員の皆さまや、万博会場にお越しの多くの皆さまにご参加いただき、パネルトークを通じて、協力隊経験や、地域と海外との繋がりが地方創生や多文化共生の場でどのように生かされていくのか考える場となりました。

イベントレポートについてはこちら

プログラムの第2部、「多文化共生社会の実現」での登壇者たち

REPORT

協力隊まつり2025開催

「協力隊まつり」（主催：協力隊まつり実行委員会、共催：JICA）が、4月19日（土）と20日（日）にJICA地球ひろば（JICA市ヶ谷ビル内）会場およびオンラインで開催され、両日合わせて1,300人以上が来場しました。JICA海外協力隊を広く一般の方々に身近に感じ、国際協力に興味を持ってもらうことを目的に毎年開催されているイベントで、当日は約50団体が参加。会場では参加団体の活動報告や物販、映画「クロスロード」の上映や、協力隊経験者による講演・キャリアセミナーなどがあり、青年海外協力隊事務局では来場者への募集説明会や相談会を実施しました。

アフリカ圏のOVらが多数参加しているNPO法人LeaDのブース。会場は両日とも多くの来場者で賑わった

AWARD

懇談会後の集合写真

外務大臣感謝状授与式に JICA海外協力隊の帰国隊員89名が出席

2025年3月4日（火）、JICA市ヶ谷の国際会議場で「外務大臣感謝状授与式」が開催されました。派遣国での活動を終えたJICA海外協力隊員89名の他、来賓として協力隊を支援する国会議員や関係機関の方が出席しました。外務省国際協力局の式辞の中では、今年度で発足60周年を迎える協力隊が世界各地で現地の人々と生活を共にして地域の経済・社会に貢献してきたことが言及され、さまざまな分野での活躍への期待などが述べられました。

編集後記

4月に開幕した大阪・関西万博では、ナショナルデーの催しにその国のOVが協力するなど、いろいろな場面で協力隊経験者の方々が活躍されている模様です。クロスロード編集室でも皆さんの取り組み事例を募集していますので、何かをした／するといった情報がありましたら、右記アドレスまで是非お知らせください！（飯渕一樹）

p24「私の派遣国生活」の鈴木七桜さんは、任地の街に着いた時、「何もないところだな」と思ったそうです。でも今や大家夫妻はもちろん、その祖母や息子夫妻とも冗談を言い合う仲で、親戚が集まるホームパーティーもしばしばと聞き、そういう地域こそ、家族のつながりという豊かさがあるのだろうと思いました。（阿部純一）

クロスロード

［2025年6月号］ 第61巻第5号 通巻707号
発行日：2025（令和7）年6月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階
デザイン：亀井敏夫
印刷・製本：弘報印刷（株） 校正：佐藤智也

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

『クロスロード』は、JICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

JICA海外協力隊派遣現況

2025年4月末現在

現在の派遣国数 74カ国

アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	37	1
エチオピア	18	
ガーナ	38	
ガボン	10	1
カメルーン	18	
ケニア	44	1
ザンビア	37	
ジブチ	13	
ジンバブエ	16	
セネガル	37	2
タンザニア	32	
ナミビア	10	
ベナン	26	
ボツワナ	27	3
マダガスカル	32	
マラウイ	42	
南アフリカ共和国	3	
モザンビーク	19	1
ルワンダ	34	1

アジア地域

国名	一般	シニア
インド	18	
インドネシア	38	
ウズベキスタン	16	
カンボジア	28	
キルギス	38	
ジョージア	14	1
スリランカ	21	
タイ	36	3
タジキスタン		5
ネパール	17	3
バングラデシュ	2	
東ティモール	27	
フィリピン	15	
ブータン	23	
ベトナム	53	
マレーシア	22	2
モルディブ	5	
モンゴル	37	4
ラオス	38	2

大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	3	
サモア	14	
ソロモン	22	1
トンガ	18	
パヌアツ	17	
パプアニューギニア	18	
パラオ	26	3
フィジー	16	3
マーシャル	11	2
ミクロネシア	18	2

欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	11	

中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	23	
チュニジア	8	2
モロッコ	32	1
ヨルダン	22	

中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		6	7	1
ウルグアイ		4		
エクアドル	33	3		
エルサルバドル	29			
キューバ		2		
グアテマラ	21			
コスタリカ	17			
コロンビア	26	5		
ジャマイカ	11			
セントルシア	13	1		
チリ	7	1		
ドミニカ共和国	21	1	7	
ニカラグア	19	1		
パナマ	18	2		
パラグアイ	27	5	8	1
ブラジル			53	1
ベリーズ	13			
ペルー	40			
ボリビア	48	1		
ホンジュラス	29			
メキシコ	18	9		

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中（男性／女性）	1,590（591／999）	85（63／22）	75（26／49）	3（1／2）	1,753（681／1,072）
累計（男性／女性）	48,709（25,484／23,225）	6,732（5,434／1,298）	1,675（649／1,026）	555（256／299）	57,671（31,823／25,848）

一般 = 青年海外協力隊／海外協力隊　シニア = シニア海外協力隊　日系一般 = 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊　日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊　（単位：人）

あの日、地球の、あの場所で。

任地の思い出を聞きました。

熱情あふれる武漢は第二の故郷 帰国後も続く家族ぐるみのつながり

山田祐也（やまだゆうや）さん
中華人民共和国／日本語教育／2014年度1次隊・愛知県出身

中華人民共和国の中部、湖北省の省都である武漢市は、他の地域の人がしばしば「武漢の人間は気が荒い」と言うほど、激しい気風のイメージがあります。隊員として暮らすと、周りの皆の接し方はなるほど荒々しく、暑苦しくさえありましたが、同時に情熱的で人情味があり、異国から来た私を身内同然に受け入れてくれる温かい人たちでした。

特に配属先の職業訓練校で仲良くなった同僚の先生たちとのつき合いは文字どおりの家族ぐるみ。私も含め、持ち回りで誰かが自宅に人を呼んで夕食会をするのが日常の光景でした。みんな家族総出でやってきて、火鍋をつついたりしながら大量のお酒でうたげを繰り広げるという、本当に楽しい日々を満喫させてもらいました。

中国の宴席や酒席で定番の習慣は「干（ガン）」、すなわち乾杯で、本当に杯を乾かす一気飲み！私は赴任後初めての旧正月の時、祝宴で張り切って配属先の上長らに敬意を示そうと強い酒を「干」してひっくり返る体験をしました。そんな時に「無理せず楽しい酒を飲もうな？」と気づかってくれると共に、果敢に挑んだ私を一層受け入れてくれた様子でもあった先生たち。任期終了から1年余りたった頃、中国の別の地域で職に就いていた私が休暇で武漢へ“帰って”先生の一人に連絡すると、本人は学校で仕事中だったのですが、自宅で待つようにと言われました。そして彼のお母さんとテレビを見ながら昼食を取り、ゴロゴロして待つという、実家に帰ったような時間を過ごすことに。

まさに第二の故郷というべき武漢のことが今でも大好きで、私にとって特別な愛着のある土地です。

Illustration＝牧野良幸　Text＝飯渕一樹（本誌）

任地の食生活に彩りを！

隊員めし

今月の料理・マラウイ

特別な日に食べるマラウイ流チキンシチュー

ニャマ・ヤ・ンクーク

From Malawi

配属先の同僚の結婚式でマラウイの伝統的な布“チテンジ”を身にまとった西村さん

教える人

西村亜希子（にしむらあきこ）さん
マラウイ／薬剤師／
2019年度3次隊・大阪府出身

薬科大学を卒業して企業や薬局勤務を経た後、1年間イギリスに語学留学。その後、急性期の総合病院に病院薬剤師として16年間勤めた。小学校の授業でアフリカの難民について教わり衝撃を受けたことと、薬剤師として東日本大震災の医療チームで活動したことが協力隊参加を志したきっかけ。マラウイからの帰国後はJICA国際緊急援助隊事務局に1年ほど勤め、現在は赤十字病院で働いている。

マラウイは野生生物の宝庫。写真はリウォンデ国立公園のカバ

材料（2人分）

鶏肉（部位はどこでもよい）	500g
トマト	3個
タマネギ	1個
塩	大さじ1
油	200ml

レシピ

1. 材料を切る。鶏肉は一口大、タマネギは薄切り、トマトは小さめの角切りにする。
2. 鍋に鶏肉と浸るくらいの水と塩をひとつまみ入れて鶏肉に火が通る程度にゆでてざるに上げる。
3. ②の鶏肉が浸るくらいの油（目安として200ml程度）と鶏肉を鍋かフライパンに入れる。中火で時々上下を返しながら肉全体が茶色くなるまで揚げる（目安として5～6分程度）。
4. ③の鶏肉の鍋もしくはフライパンの油は捨てずに、軽く炒めたタマネギとトマト、塩を入れて煮込む。弱火で10分くらい煮込んだら出来上がり。

＼ 料理について ／

ニャマ・ヤ・ンクークは結婚式などパーティーの時によく食べられる料理です。現地では鶏を何羽かさばいて頭から足の先まですべての部位を使い、特につま先は人気で取り合いになります。特徴は油が多いことと塩味が強いことで、油で煮るシチューといったイメージです。一見シンプルな料理ですが、鶏のうま味と、タマネギの甘さ、トマトの酸味がまろやかなソースに溶け合い、ご飯にも合うので、ぜひ試してください。

レシピ・写真提供＝西村亜希子さん　Text・再現料理・Photo（再現料理）＝阿部純一（本誌）

クロスロード 2025年6月号
2025年6月1日発行（毎月1回1日発行）第61巻第5号 通巻707号
編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

公開！

私の派遣国生活

〔ホンジュラス〕

写真提供＝鈴木七桜さん　Text＝阿部純一（本誌）

鈴木七桜（すずきななお）さん
栄養士／2023年度3次隊・宮城県出身

活動の様子

栄養指導を行う鈴木さん。「目の見えないおばあちゃんが半年ぶりに受診に来て『あなたのこと覚えてるわよ。スペイン語しゃべれなかったのに、今は上手になってホンジュラスの人かと思ったわ』と言ってくれてとても嬉しかったです」

任地サン・アントニオ・デ・オリエンテ市は首都テグシガルパからバスで1時間ほど。配属先は14カ所の保健所を管轄する事務所で、私は生活習慣病の患者や健診に来る妊婦、乳幼児の母親に対して栄養指導を行っています。ホンジュラスでは多くの市民が利用する保健所に栄養士がいないため、私の帰国後も医師や看護師が栄養指導に利用できる教材を作っていて、それを現場に導入することが残る任期での大きな目標です。

暮らしている市、町、村

配属先がある町は森林に囲まれていて、限られたエリアに学校や保健所などの公共機関が集まっています。配属先の近くにカフェがあり、時間が空いた時、そこでコーヒーとスイーツを楽しむのが気に入っています。森を抜けた国道沿いにサモラノ大学という農業大学があり、職場の上司の夫が教壇に立っている関係で見学させてもらいましたが、とても広く、畑や美しい教会があって、素晴らしい環境でした。

サモラノ大学の教会。全寮制で各国からの留学生を受け入れるため、どの宗教にも対応できるようシンプルな造りになっている

町にあるカフェでのコーヒータイムがお気に入り。仲間の栄養士隊員（左）と行った時の一枚

食べ物

トラックの野菜販売はスーパーより安くてよく利用している

ホームステイ先のおばあちゃんが作ってくれる「タマリート」という、トウモロコシ粉を練って葉で包み蒸した料理がほんのり甘くて、すごくおいしいです。こちらでは野菜や果物、肉類は昼食で食べることが多いです。私は昼食は自炊していて、やはり食べたくなって和食を作ることが多いですね。住まいの近くに大きなスーパーがあるのですが、少々値段が高めなので、トラックで販売している野菜などを買うことが多いです。

住まい

国道沿いにある配属先の上司の家にホームステイしていて、私は1階の1部屋を借りています。部屋にはバス・トイレもついていて快適です。ただ、夏は暑くなって日中30℃を超えることも珍しくなく、空調が扇風機だけなのはきついですね。大きな庭もあって、そこにあるハンモックで本を読んだりする時間が好きです。週末に大家さんの家族や親戚とパーティーをすることが多く、私も手作りスイーツを振る舞ったりしています。

広い庭では時々、皆でバーベキューを楽しんでいる

ホームパーティーの時に鈴木さんが作った花柄のフルーツサンドは、皆に好評だった

タマリートを主食に、煮豆やチーズ、卵、アボカドなどを添えるのが朝食の定番

鈴木さんが借りている部屋

大家さん一家との一枚。「皆、明るくて楽しい方たちで、上司夫婦、そのお母さん、長男夫婦を含めて仲良くしてもらっています」

JICA ジャイカ

JICA海外協力隊応援基金
皆様からの応援お待ちしています

青年海外協力隊事務局公式インスタグラム
JICA海外協力隊のリアルお見せします
JICA_KYORYOKUTAI

JICA海外協力隊公式LINEアカウント
シゴト診断、教えて！FAQなどぜひ活用下さい